

『万六の墓』

伊与木郷へ流刑となった万六は、伊与木郷の大庄屋の世話で前大庄屋の屋敷の奉公人となって住んでいました。そのうち、小黒ノ川のお兼と恋仲となりましたが、親に反対され仁井田へ移り住みました。一年後、万六は無罪となり、仁井田から伊与木に帰ってきました。再び大庄屋の世話で小黒ノ川で奉公人となり、その後、奉公先の主人の世話でお兼と一緒に住み、住居を構えて小黒ノ川で住みました。



※昭和59(1984)年8月2日旧佐賀町文化財指定。

■どくれの万六

文政12年、森郷(現在の土佐町)は大飢饉になり、農村にも餓死者が出ました。

時の大庄屋は大変腹黒く、私腹を肥やすことのみを考え、年貢の取り立ては大変厳しく、上役人には賄賂を贈り、自分はぜいたくをするという悪政が続き、百姓らは困り果てていました。

が、やがてこのことが大目付の知ることとなり、郡奉行に命じて調べた結果、石原村の村民が飢えをしのいで納めた年貢が未納になっていた。

このことに村民は驚き、庄屋に伺いを立てたところ、大庄屋は自分の非を隠すため村人の代表3人を牢屋に入れてしまいました。

これに怒った百姓80人は、大庄屋に討ち入り3人を助け出し、大庄屋の手元にあった記録を持ち帰りました。その記録を調べて百姓万六が大庄屋を追及し、郷士・川邑六左衛門と2人で大庄屋の悪事をあばきました。

後日、奉行所よりおとがめがあり、石原村は代表者2人を差し出すという達しがあり、六左衛門と

万六は率先して名乗り出ました。大庄屋討ち入りの罪人として六左衛門は入牢させられ、万六は幡多郡伊与木郷に流されました。また大庄屋も罪に問われました。

■土佐のどくれ

「どくれ」は、土佐の風土と歴史が生んだ代表的な土佐人気質だと言えます。

さて、土佐の風土はというと、海と山に囲まれた里、南には太平洋が広がり、北には高く険しい四国山脈がびょうぶのようにそそり立っています。

夏には「さだち」というにわか雨が降り、夏から秋にかけては台風銀座というほど台風が襲います。

そうして台風や「さだち」の後にはからりと晴れあがった青空がのぞいて、気分を一新します。

こうした土佐の風土が、豪快で現実的で淡白な性格の形成に大きな役割を果たしたことは否めないでしょう。

一方歴史をみると、四国のほぼ中央を東西に走る四国山脈は、土佐と他国との交流を拒み続けています。

孤立的で意地っ張りな反権的な性格が培われ、それが「どくれ」とか「いごっそう」とかいう土佐人気質となりました。

「どくれ」は片意地な偏屈者とか、へそ曲がりのすね者を言います。でも変にじめじめした陰湿さはありません。カラッと明るく南国の風土を反映してひょうげな味も持っています。



■万六のどくれ話

「もっその話」

「高知ゆきのわらじ」

「肥も一心」

などたくさんあります。

○お問い合わせ

教育委員会文化振興係  
(大方あかつき館内)

☎43-2110(直通)